

地歴公民 (歴史総合・世界史探究)

名古屋大学 文学部、情報学部 (人間・社会情報学科) (前期) 1 / 2

<全体分析>

試験時間 90分

解答形式

大問単位では昨年同様、問題Ⅰが長文の論述式(350字)、問題Ⅱが論述式(150字程度まで)、問題Ⅲ・Ⅳが語句で答える記述式と論述式(300字程度まで)を併用する問題であった。

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・**やや増加**・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・**やや難化**・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

問題Ⅰは、昨年と同じく、歴史総合を意識した日本史との共通問題で、指定語句を用いる350字の長文論述となっているが、今年はビゴアの風刺画が用いられた。指定語句を「すべてを用いる」「下線を引くこと」という形式に変化はなかった。

出題分野については、地域別では、問題Ⅱ～Ⅳにおいて昨年は欧米2題とアジア1題が出題されたが、今年は欧米1題とアジア2題となった。時代別では、昨年出題されなかった戦後史は、今年も出題されなかった。史料や文献資料を用いる論述式の設定が増えたことで、制限時間内で解答するのが困難となった。

その他トピックス

全体として、史料や文献資料を読み解く力を求める問題が多く出題された。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述式 (長文 350字)	イギリスから見た 日露戦争	ビゴアの風刺画をもとに、イギリスとロシアによるグレートゲームに関連して述べる問題。風刺画に描かれている人物(動物)が示す国は容易に判別できるので、比較的書きやすい問題となっている。	標準
II	論述式	ペロポネソス戦争 とアテネの覇権	引用した文献資料・史料(トゥキュディデスの『歴史』)を、教科書で学習した知識をもとに読み解いていく問題。すべての設問が論述式であり、問1はペルシア戦争でのアテネの活躍を述べればよいが、問2・問3は文献資料・史料の解釈が求められているので、戸惑った受験生もいたと思われる。	やや難
III	記述式 論述式	前漢時代の中国	引用されている史料は難解であるが、記述式の設問は標準的レベルであった。史料の深い読み取りが必要な問3(イ)や史料の解釈を求められる問5の論述式は、解答しにくい。	やや難
IV	記述式 論述式	18～19世紀の中国 と東南アジアの交流	文献資料を引用して、中国と東南アジア諸国の貿易をめぐる交流について問う問題。記述式の設問は、標準的なレベルの出題であった。論述式の問5は、教科書の内容をもとに資料文を参考にしながら書いていけばよい。	標準

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- 名古屋大学の世界史は、史料・文献などが用いられることが多く、これらを読み取る力が求められている。一部に難しい設問が出題されることがあるが、全体の難易度としては、標準的なレベルの設問が大半であるので、教科書・用語集などを丁寧に学習していけば対応できる。
- 大問のテーマは、欧米地域では、ギリシア・ローマなど古代地中海世界、中世～近代のヨーロッパ史、アメリカ合衆国史とこれに関連する近現代の国際関係史が頻出している。また、アジア地域では、中国史をはじめ、インド・東南アジア史、イスラーム世界、広域の交易活動などが出題されている。過去には、戦後史も出題されているので、教科書の内容を最後まで手を抜かずに学習しておくことが重要である。テーマ問題の対策としては、模試や問題集でテーマ問題にあたった時にそのリード文を熟読し、テーマの内容を文章で理解していくと効果的であろう。
- 長文論述は、近年は基本的・標準的レベルの出題が多い。扱われるテーマは、歴史的事象の背景・構造・経過やその因果関係などが多いので、日頃から世界史を大きな視点で捉える学習をしていく姿勢が大切である。対策としては、指定語句・グラフ・史料・写真などを使った論述問題の演習が必要となる。具体的には、名古屋大学の過去問だけでなく、同様の形式で出題する他大学の過去問や論述対策の問題集にも取り組むのがよいだろう。また、論述演習にあたっては、学校や予備校での添削指導をうけて、欠点を修正しておきたい。
- 『世界史探究』の教科書には、随所に多くの発問が用意されている。これらの発問をおろそかにせず、1つ1つ丁寧に答えを考察することで、基本事項の理解が深まり、論述力も高められる。
- 過去問全体をよく研究し、頻出する事項については、記述式の設問であっても100字程度までの短い文章で説明できる学力を身につけたい。